九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

上海のユダヤ人難民社会における職業教育

阿部, 吉雄
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際共生学講座

https://doi.org/10.15017/7148427

出版情報：言語科学. 46, pp.1-9, 2011-03-17. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

上海のユダヤ人難民社会における職業教育

阿　部　吉　雄

初めに

第2次世界大戦（1939 - 1945）前後の時期、中国の上海にはナチス・ドイツの迫害を逃れた中欧系ユダヤ人難民のコミュニティが存在した。ナチスが政権を獲得した1933年から5年間に約300人が上海に移住したが、1938年11月の水晶の夜事件（ナチスによるドイツ全土における反ユダヤ人暴動）で多くのユダヤ人が逮捕拘束され強制収容所に送られて以降、1938年12月から1939年8月にかけて毎月1000人以上が到着した。当時ナチスはさまざまな差別・迫害政策によりユダヤ人の自発的な出国を推進していたものの、ユダヤ人を進んで受け入れる国はなく、世界中で唯一上海租界だけが入国ビザが不要だったことから、1年足らずの間に1万5000人以上のユダヤ人難民が移住した。1939年8月以降上海租界当局が厳しい入境制限策を採ったため、流入は急速に減少したものの、1941年12月の太平洋戦争開始時点で約1万7000人に達した。

これらの人々はドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランド等の出身者であるが、ヨーロッパとは気候、言語、文化、習慣、社会制度などが異なる上海での生活に順応するのは容易でなく、特にヨーロッパで習得した職業能力を経済状況の違いからまったく発揮できないことも珍しくなかった。本稿ではこれらの成人ユダヤ人難民の職業再訓練や、基礎教育を終えた14歳以上の若年者の職業教育について調査する。

最初の試み

1938年8月上海のユダヤ人難民が約200人に達した時、チェコ人とドイツ人（いずれもユダヤ人および非ユダヤ人）のグループによってヨーロッパからの難民のための「ヨーロッパ難民救援国際委員会」(International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC) が作られた。[注1]その責任者は1898年から上海に在住し、キリスト教に改宗したハンガリー系ユダヤ人実業家 Paul Komor (1886-1973) で、すぐに Komor 委員会として知られるようになる。Komor 委員会は到着した難民を登録し、彼らが住居や職を見つけるのを助けた。日本の興亜院華中連絡部が1940年1月に作成した『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ欧州避難猶太人）』には、1939年4月15日までに Komor 委員会において行われた3116人の職業登録が記載されている。その内容は以下の通りである。[注2]

各種商業	1100	獣肉業	35	料理人	67
事務員	179	パン焼工	21	印刷工	5
各種技師	69	錠前製造修理工	32	皮革工	24
電気技工	39	靴工	28	時計修理工	11
絹綿紡職工	170	洋服工	54	広告工	4

各種音楽士	141	医師	57	理髪師	21
画家	8	歯科医	13	其ノ他ノ雑工	9
教師	10	化学技師	20	特技ヲ有セザル者	884
運転手	47	弁護士	21		
ホテルポーターボーイ	30	建築士	8		

これらは基本的に移住前にヨーロッパで就いていた職業、またはナチスによる公職からのユダヤ人追放で職業変更を強いられる以前の職業を挙げていると考えられる。まず単一の項目としては「各種商業」が 1100 人で断然多い。ユダヤ人の移住を認める国々は技術者や農地開拓者としての訓練を受けた者を求めたため、商業従事者がそれらの国に移住するチャンスは少なかった。1100 人と大雑把な数字であるのも、上海で就職する見込みがあまりないとみなされたからであろう。Komor 委員会に商業以外の職業上の技能を申告した者は 1123 人で、この他に「特技ヲ有セザル者」と申告した者が 884 人いる。その中には労働者、公務員、ジャーナリスト、学生、専業主婦などが含まれていると考えられる。割合で見ると、難民の 35%が商業関係者、36%が何らかの技能習得者、29%が特に具体的な技能を持たない者になる。

『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ欧州避難猶太人）』はユダヤ人難民の上海での就業状況について、「自力デ独立生計ヲ立テツヽアル者ハ一千五百名トナル次第ニシテ各種ノ技師、電気工、自動車運転士、医師、楽士等ノ有技術者ノ就職ハ比較的容易ニシテ就職率」が高いと伝えている。[注3]それゆえ上海で職を得るのに有利な技術を難民に与えることが、支援組織にとって緊急の課題となった。上海在住のユダヤ人ならびに欧米人にとっても、同じ白色人種であるユダヤ人難民が中国人と同様の肉体労働の仕事につくのは好ましいことではなかった。それゆえ支援委員会は Pingliang Road（平涼路）に作った最も貧しい難民たちの収容施設「ハイム」に 1939 年 8 月大工や電気工育成用の作業場を設置し、ヨーロッパで習熟した商売や仕事につくことができない難民たちの再訓練を行い、彼らに当面の活動の場を与えた。[注4]しかし主に独身の男性約 1000 人を収容した Pingliang Road ハイムで、この再訓練への参加を希望したのは 20%にすぎなかった。その他の難民は作業の報酬が少なすぎると考え、外で仕事を探すことを選んだ。[注5]そこで得られる職は大抵の場合雑貨の行商で、それは彼らの本来の技能や経験を生かせるものではなかった。Pingliang Road 以外のハイムでもいくつかの訓練が提供されたが、設備や予算が乏しかったこともあり、あまり成果は上がらなかった。[注6]

14 歳までの難民子弟を教育するため、1940 年 1 月に Kinchow Road（荊州路）ハイムに上海ユダヤ人青少年協会学校（Shanghai Jewish Youth Association School）が開校した。この学校はドイツ系ユダヤ人難民の Wilhelm Deman 教授を責任者とする S. J. Y. A. Junior Club を併設し、生徒たちを対象に製本、マニキュア、手仕事、体操、ファッションデザイン、調理、パン焼き、フランス語、郵便切手収集、簿記基礎、社交ダンスと礼儀作法、デッサンと絵画、ラジオ組み立て等のプログラムを提供した。商業コースでは生徒たちが S. J. Y. A. Junior Club 貯蓄銀行を運営した。[注7]

英語教育

上述の興亜院華中連絡部『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ欧州避難猶太人）』は英語能力の必要性も指摘している。「彼等ガ上海ニ於テ資本ヨリ何ヨリモ就職上ノ最難関ハ言語相違ノ点ナリ、英語万能ノ上海ニ於テ独語以外ヲ知ラザル彼等ノ大多数ハ就職開業何レニモ不向ニシテ目下彼等ハ熱心ニ英語ヲ学ビツヽアル様ナレバ近クハ就職率ノ増大認メラルルニ至ルベシ。」[注8]

上海ユダヤ人青少年協会学校の授業は英語で行われた。それは英語が上海の外国人社会の公用語であったという理由に加え、多くのユダヤ人難民がアメリカへの再移住を目指しており、子どもたちに将来の生活の準備をさせることを望んだからである。学齢期を過ぎた者を含め、自然な言語習得能力がまだ失われていない未成年の難民子弟たちにとって、英語の学習はさほど難しくなかった。

一方、学校を離れて久しい大人たちにとって新たな言語を習得することは困難な課題だった。すでに支援委員会は上海へのユダヤ人難民の大量流入が始まった 1938 年 12 月に、財政的支援を受ける難民は各ハイムで開講される英語コースを受講するよう求めていた。[注9]上海ユダヤ人青少年協会はその学校内に 1000 人を超える成人受講者のための英語クラスを開いた。1941 年 4 月に開校された Freysinger ユダヤ人小・中学校（Freysinger's Jewish Elementary- and Middle School）[注10]では、昼間 150 人の生徒が通常の授業を学び、夜 500 人の成人が英語コースを受講した。Komor 委員会はイギリスの言語学者 Charles K. Ogden が 1930 年に考案した Basic English[注11]の初級者コース（土曜日以外の毎日午前 2 時間）と上級者コース（土曜日の晩）を 1941 年 2 月 East Seward Road（東熙華徳路、現在の東長治路）に開校した。上海ユダヤ教区（Jüdische Gemeinde Shanghai）も英語コースを開講した。[注12]

難民たち自身も英語コースに参加する以外にアメリカ映画を見たり、ラジオで英語放送を聞いたりするなどの方法で英語に慣れようと努めた。1939 年 5 月から 1941 年 12 月の日米開戦まで、ドイツ系ユダヤ人難民の Horst Levin が上海のアメリカ系放送局 XHMA で毎日担当したドイツ語による難民向け番組では、毎週水曜日と土曜日にドイツ系ユダヤ人難民の William Carstens 教授による英語レッスンのコーナーがあった。[注13]

このような支援組織、コミュニティの努力や難民自身の意欲にもかかわらず、高い出席者数で始まった英語クラスの多くは消滅しがちだった。家族を養う者は自分の時間を収入が伴う仕事のために直接費やすことを選んだ。この状況が変わったのは、後述するように太平洋戦争終結後アメリカ軍が上海へ進駐し、多くの難民が基地の従業員として採用され、また難民の経営するレストラン、カフェー、クラブ、各種店舗が新たな顧客の到来により繁盛するようになってからである。

ORT の創設

上海ユダヤ人青少年協会学校や Freysinger ユダヤ人小・中学校のような基礎教育は 14 歳までの難民子弟が対象であり、この年齢を超えている若年者は仕事につくための知識も経験もなかった。彼らに活動の機会と就業に必要な能力を与えるため、1941 年 Pingliang Road ハイムに再度実習作業所が設けられ、若年者の職業教育と職のない成人の再訓練が行われた。300 人が家具職

人、錠前屋、電気技術者、煉瓦（タイル）工のコースを受講した。[注14]

Pingliang Road ハイムは 1941 年 8 月で閉鎖されたが[注15]、同年 9 月、ポーランド系ユダヤ人難民 Chaim Rozenbes が ORT の上海支部を開く。ORT はロシア語の Obschestvo Remeslenovo i. zemledelcheskovo Trouda（手仕事と農業のための協会）の頭文字であり、1880 年ロシアで誕生した。当時のロシアではユダヤ人の居住地や職業が法律で制限されており、彼らは資本主義化する社会で必要とされた技能を持たなかった。時代の変化に対応できず、ますます困窮するユダヤ人に手工業や農業の技術を習得する訓練を行うために ORT は組織された。ロシアの ORT はスターリンの粛清下で 1938 年に活動を終えたが、1921 年にはベルリンで世界 ORT 連合が設立されており、Rozenbes はポーランドにおける ORT 委員会のメンバーだった。上海の ORT は難民への支援委員会を構成するセファルディ系ユダヤ人、ロシア系ユダヤ人とユダヤ人難民の代表で構成され、難民の多くが住む虹口・揚樹浦地区東部の Jansen Road（近勝路、現在の景星路）の訓練センターで錠前屋、大工、電気技術者などの数コースで始まった。[注16]その後製本、ファッションデザイン、造園・園芸、仕立屋、美容師、菓子屋、革職人、毛皮職人、ラジオ修理工、金細工師、歯科技工士などのコースが加わり、21 クラスに達した。6 ヶ月間無料で訓練が行われ、道具のほとんどは生徒自身によって作られた。彼らの作品は学校の基金に充てるために販売されることもあった。[注17]14～60 歳の生徒の数は平均して 150 人から 200 人で、1944 年には 500 人以上になった。戦後上海にアメリカ軍が到着し、ユダヤ人難民の 1 割にあたる 1500 人近くを雇い、駐屯地販売店の店員や大工、錠前屋、メカニック、運転手、事務職員として働かせるようになると、ORT は提供するコースを拡大し、技術職のために 1000 人以上の難民を訓練した。また文化的講義と英語コースも実施した。[注18]

1941 年 12 月太平洋戦争が始まり、上海が日本軍に占領されると、海外のユダヤ人組織からの送金が停止する。上海におけるユダヤ人難民への支援の中心だったセファルディ系ユダヤ人富豪たちは英国国籍を取得していたため、預金を封鎖され、難民への援助が不可能になる。その結果、上述の上海ユダヤ人青少年協会学校は S. J. Y. A. Junior Club を維持できなくなり、Junior Club の責任者だった Deman は Gregg ビジネス・スクール（後に Gregg ビジネス・カレッジ）を開校し、月謝 30 上海ドルでタイプ、速記、商業英語、商法、書類整理、簿記、一般事務等の商業コース、日本語と中国語の言語コース、研修コース、成人教育コースを設けた。彼は 1942 年秋以降、後述の ORT による見習い用補足学校の設置準備にも関わる。[注19]

ギルドと ORT の協力

ユダヤ人難民が上海へ到着した当初、職人たちは安い労賃の中国人に対抗できないだろうと考えられた。しかし熟練したユダヤ人職人が開業した靴屋、家具修繕、仕立屋、金属細工、帽子屋などは、その高い能力を武器に中国人同業者との競争に耐えられることを証明した。例えば日本人顧客はユダヤ人難民の仕立屋のデザインや裁縫師のていねいな仕事を高く買っていた。中国企業が腕のいいユダヤ人職人や技術者を採用し、「ヨーロッパ規格」の品質を宣伝する例も見られた。[注20]この好評価はユダヤ人難民を勇気づけ、1943 年夏にギルド（職人組合）が結成され、上述の ORT 設立にもつながった。

ギルドが結成されたのにはもうひとつ理由がある。1943 年 2 月の上海地区日本陸海軍総司令官名の布告により、ユダヤ人難民はその居住・就業を虹口・揚樹浦地区の約 2 ㎢の「指定地域」（いわゆる上海ユダヤ人ゲットー）内に制限される。これにより約半数の難民が移住を迫られ、狭い地域の中で激化した競争は共倒れを招く恐れがあった。ギルドは縮小する市場において賃金と価格を管理し、訓練と免許の基準を確立することに成功し[注21]、1943 年に 64 人だったギルドの会員は 1944 年に 372 人、1945 年に 406 人、1947 年に 665 人に増えた。[注22]

ギルドは ORT と協力し、親方たちの下にいる見習い（徒弟・実習生）のための補足学校を開校した。そこでは 14～21 歳の見習いが、自分の選んだ領域において、実地の仕事だけでは得られない理論的知識に関する授業および一般教養の授業を受けることができた。戦後アメリカ軍の基地で多くのユダヤ人難民が雇用されるようになると、1947 年までに 229 人の見習いが熟練労働者に訓練され、292 人がその補足学校に通った。[注23]

ユダヤ人難民たちの多くが住んだ虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が 1944 年 8 月 24 日付けで作成した『外人名簿』には 1 万 2309 人のユダヤ人難民が記載されており、そこには職業を「Apprentice（見習い）」と申告している難民が 123 人いる。下の表は 13～23 歳の各年齢の男女別の総数および「見習い」、「学生」、「無職」、その他何らかの職業を挙げた者の人数をまとめたものである。[注24]

	男性					女性				
年齢	総数	見習い	学生	無職	その他	総数	見習い	学生	無職	その他
13 歳	24	0	18	6	0	36	1	19	16	0
14 歳	45	4	24	15	2	25	1	19	5	0
15 歳	40	13	18	6	3	50	13	16	16	5
16 歳	47	13	11	9	14	42	12	10	9	11
17 歳	43	20	9	3	11	49	5	16	10	18
18 歳	49	9	6	13	21	52	6	1	12	33
19 歳	56	12	4	11	29	49	4	3	12	30
20 歳	65	4	8	13	40	49	0	1	16	32
21 歳	60	3	7	12	38	45	0	0	14	31
22 歳	85	1	19	12	53	58	0	0	15	43
23 歳	81	0	21	15	45	63	1	0	26	36

13 歳の「無職」22 人（男性 6 人、女性 16 人）は実際には「学生」と考えられる。男性の年長者の「学生」にはユダヤ教の神学校（イェシバ）の学生「Rabbinical student」も含まれ、18 歳に 2 人、19 歳に 1 人、20 歳に 7 人、21 歳に 5 人、22 歳に 18 人、23 歳に 18 人いて、1 人を除きすべてポーランド系ユダヤ人難民である。彼らは第 2 次世界大戦初期にポーランドに侵攻したドイツ軍に追われ、リトアニアに逃れて、そこで駐カウナス日本副領事杉原千畝から日本通過ビザを得てヨーロッパを脱出した。[注25]

上の表から 15〜19 歳で「見習い」が多いことが分かる。[注26]「その他」は何らかの職業を挙げている人数だが、未成年者は実質的に「見習い」であったろう。[注27]彼らは上海ユダヤ人青少年協会学校等での基礎教育終了後、ギルド制度により職業を学び、自分が役に立つ人間であるという感覚と未来への希望を持ち続けることができた。また女性の「無職」の割合が高いのは、家族のために家事をすることが多かったからと考えられる。

終わりに

ナチスによる迫害から逃れ上海へたどり着いたユダヤ人難民を待っていたのは、人間の尊厳どころか生命さえ脅かしかねない生活苦だった。このような「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」の必要性を認識し、国連開発計画（United Nations Development Programme / UNDP）が 1994 年に『人間開発報告書』で初めて提唱した「人間の安全保障」は、現在の国際社会においてますます重要な考え方になりつつある。日本政府も 2005 年に策定した ODA 中期政策において「人間の安全保障」を「一人ひとりの人間を中心にすえて、脅威にさらされ得る、あるいは現に脅威の下にある個人および地域社会の保護と能力強化を通じ、各人が尊厳ある生命を全うできるような社会づくりを目指す考え方」と定め、「開発支援全体にわたってふまえるべき視点」と位置づけた。

その実現の中心となる独立行政法人国際協力機構（Japan International Cooperation Agency / JICA）は、行政能力を強化する「トップダウン・アプローチ」と住民参加型の「ボトムアップ・アプローチ」を組み合わせた支援を行っている。この手法に照らして上海のユダヤ人難民の職業教育を考えてみると、ORT は「トップダウン・アプローチ」、ギルドは「ボトムアップ・アプローチ」であり、両者が融合して見習い用補足学校が生まれたという一種の理想形と言えよう。それによりユダヤ人難民は上海の中国人労働者よりも高いレベルの技能を得て、彼らとの経済的・政治的摩擦を回避するとともに、基礎教育を終えた未成年者を「失われた世代」にせず、貧困と脆弱性の慢性化を防ぎ、太平洋戦争、とりわけゲット一期という厳しい時期にもかかわらずコミュニティを維持発展させることに成功した。ORT はユダヤ人の、ギルドは西欧の伝統の中に生まれた制度・組織であり、当事者に馴染みのある方法を採用したという点で、現代の開発支援にとっても示唆に富む事例である。また難民が難民を教育・訓練することで、彼らの当事者意識が生まれるとともに、ドイツ系、オーストリア系、ポーランド系など出身国の違いから反目し合っていた難民社会内の各グループ間の融和が進んだことは、コミュニティにとって意義あるできごとだった。

注

1. Sir Horace Kadoorie（1902-1995）や Sir Victor Sassoon（1881-1961）など数人の上海在住セファルディ系ユダヤ人富豪や、ロシア革命を逃れて上海に移住したユダヤ人が参加した。
2. 興亜院華中連絡部『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ欧州避難猶太人）』（興亜華中資料第 102 号、中調聯政資料第 2 号）、昭和 15 年 1 月、17〜19 頁。『上海ニ於ケル猶太人ノ状況

（主トシテ欧州避難猶太人）』では総計 3116 人としているが、そこに挙げられた数字を合計すると 3107 人になる。

3. 『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ欧州避難猶太人）』、19 頁。
4. Marcia Reynders Ristaino: „Port of Last Resorts". Stanford, California (Stanford University Press) 2001. S. 119.
5. 1941 年 4 月にある新聞記者がハイムを訪問した時、作業をしていたのは 60 人だった。Anna Ginsbourg: ‚Thousands of Shanghai's German-Jewish Refugees Lead Lives of Disillusionment, Despair'. In „The China Weekly Review". April 26. 1941. S. 253.
6. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945". Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 ([1]1976). S. 133.
7. Joan R. Deman: ‚Bildungsarbeit in Shanghai'. In „Zwischenwelt". (18) 2001. S. 44.
8. 『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ欧州避難猶太人）』、20 頁。
9. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". New York (The Free Press) 1994. S. 5.
10. 校名はドイツ系ユダヤ人難民の教育者 Ismar Freysinger の名による。Herman Dicker: „Wanderers and Settlers in the Far East. A Century of Jewish Life in China and Japan". New York (Twayne Publishers) 1962. S.106 f.; 拙稿「上海のユダヤ人難民子弟への学校教育」、『言語文化論究』（21）2006 年、九州大学大学院言語文化研究院、35 頁。
11. 簡略化された文法による英語で 850 語の単語からなり、7 週間での習得を可能とした。James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". S. 95 f.
12. David Kranzler: „Japanese、 Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945". S. 396 f.
13. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". S. 83. Carstens 教授は自身の英語学校を開いていた。
14. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". S. 153.
15. Marcia Reynders Ristaino: „Port of Last Resorts". S. 120.
16. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". S. 201. ORT が置かれた Jansen Road は 1943 年に設置された後述の上海ユダヤ人ゲットーの外側であったにもかかわらず、そこへの通学は日本当局によって認められた。1942 年 1 月に上海ユダヤ人青少年協会学校が移転した East Yuhang Road（東有恒路、現在の東余杭路）もユダヤ人ゲットーの外側だったが、ゲットー設置後も生徒たちの通学が許された。これらの措置はゲットー設置における日本側の意図を理解する上で興味深い。拙稿「上海のユダヤ人ゲットー設置に関する考察」、『言語文化論究』（15）2002 年、九州大学大学院言語文化研究院、51～53 頁。なお、ORT は後に大連路に移転した。The Rickshaw Express Web. http://www.rickshaw.org/guild.htm
17. Rena Krasono: „Strangers Always. A Jewish Family in Wartime Shanghai". Berkeley,

California (Pacific View Press) 1992. S. 136.

18. David Kranzler: „Japanese、 Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945". S. 395 f.; James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". S. 229.; Felix Gruenberger: ‚The Jewish Refugees in Shanghai'. In „Jewish Social Studies". (12) 1950. S. 346.
19. Marcia Reynders Ristaino: „Port of Last Resorts". S. 323.; Joan R. Deman: ‚Bildungsarbeit in Shanghai'. In „Zwischenwelt". (18) 2001. S. 45.
20. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945". S. 290 u. 395. 例えばMa Ling Canned Goods Co. Ltd.という中国資本のトマトケチャップ製造会社は、新聞広告において「ヨーロッパ人の監督の下、最新の衛生的な工場で製造」という表現でその品質の高さを宣伝した。„Shanghai Jewish Chronicle". Nr. 138 (22. Oktober 1939), S. 8.
21. James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". S. 201.
22. Felix Gruenberger: ‚The Jewish Refugees in Shanghai'. S. 343 u. 346. 後述のORTとギルドの協力による見習いのための補足学校に通って理髪師になり、ギルドに参加したGerhard Heimann の 1947 年 5 月の会員証番号は 583 番である。The Rickshaw Express Web. http://www.rickshaw.org/images/guild3.jpg
23. Felix Gruenberger: ‚The Jewish Refugees in Shanghai'. S. 346.
24. 13歳から23歳までの中の「見習い」は総計122人になる。残りの1人は6歳の女子であり、これは恐らく調査票においてその1行上に記載された15歳の兄の職業「歯科医」に本来続くはずの「見習い」が、前半部（歯科医）の下に記入されており、それが『外人名簿』を作成する際に誤って妹の職業として転記されてしまったと考えられる。
25. 『外人名簿』にはポーランド系ユダヤ人難民が914人記載されており、うち「ラビ」が16人、「神学校教師」が5人、「神学生」が241人である。拙稿「上海のポーランド系ユダヤ人難民」、『言語文化論究』（44）2009年、九州大学大学院言語文化研究院、121～132頁。
26. 「見習い」には「Apprentice」の他に、「Baker apprentice（パン屋見習い）」のように具体的な職業名がつく者も含む。「Assistant（助手）」を含む職業名を挙げている者はこの表全体で16人になるが、これは「見習い」に数えていない。
27. 17歳以下で一人暮らしの者はおらず、18～19歳でも7%弱である。家族と同居していることも、職業的・経済的に独立していない「見習い」である傍証になろう。一人暮らしの割合は20～21歳では17%、22～23歳では31%、24歳で37%、25歳で46%と、年齢とともに増大する。若年者に一人暮らしが少ない理由として、上海のユダヤ人難民の大多数が到着した1939年は『外人名簿』作成の5年前であり、その当時に学齢期だった子どもは家族とともにヨーロッパを離れたからと考えられる。

参考文献

阿部吉雄：「上海のユダヤ人ゲットー設置に関する考察」、『言語文化論究』（15）2002 年、九州大学大学院言語文化研究院、45～59 頁。

阿部吉雄：「上海のユダヤ人難民子弟への学校教育」、『言語文化論究』（21）2006 年、九州大学大学院言語文化研究院、31～39 頁。

阿部吉雄：「資料調査：上海虹口地区『外人名簿』（1944 年 8 月）に見られるユダヤ人難民)』」、『言語文化論究』（21）2006 年、九州大学大学院言語文化研究院、147～163 頁。

阿部吉雄：「上海のポーランド系ユダヤ人難民」、『言語文化論究』（44）2009 年、九州大学大学院言語文化研究院、121～132 頁。

Deman, Joan R.: ‚Bildungsarbeit in Shanghai'. In „Zwischenwelt". (18) 2001. S. 44-46.

Dicker, Herman: „Wanderers and Settlers in the Far East. A Century of Jewish Life in China and Japan". New York (Twayne Publishers) 1962.

Ginsbourg, Anna: ‚Thousands of Shanghai's German-Jewish Refugees Lead Lives of Disillusionment, Despair'. In „The China Weekly Review". April 26, 1941. S. 252-253.

Gruenberger, Felix: ‚The Jewish Refugees in Shanghai'. In „Jewish Social Studies". (12) 1950. S. 329-348.

Kranzler, David: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945". Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 ([1]1976).

Krasono, Rena: „Strangers Always. A Jewish Family in Wartime Shanghai". Berkeley, California (Pacific View Press) 1992.

Ristaino, Marcia Reynders: „Port of Last Resorts". Stanford, California (Stanford University Press) 2001.

Ross, James R.: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China". New York (The Free Press) 1994.

本稿は平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「人間の安全保障の観点による上海のユダヤ人難民社会の研究」（研究代表者：阿部吉雄）による研究成果の一部をまとめたものである。